

著者インタビュー 小熊英二



おくま・えいじ 1962年東京生まれ。出版社勤務を経て、慶応義塾大学総合政策学部教員。著書に『(日本人)の境界』『単一民族神話の起源』『日本という国』『在日一世の記憶』(共著)など多数。

時の活動家には、痛い話になるかもしれないけど。

敗戦後の学生運動や六〇年安保という前史からはじまり、慶大闘争、早大闘争、中大闘争、日大闘争があった。東大闘争までが上巻です。下巻は、高校闘争、新宿事件や街頭闘争、そしてベ平連、連合赤軍、リブ運動とつづぎます。

とにかく、ビラやパンフレットだけでなく、雑誌や

形されてしまっています。

当時の若者の言葉は、その多くが生硬で、拙い。ただ、百枚に一枚ぐらい、とても素直で、切々とした文章に出会うことがある。

そんな中に、本書の冒頭にもつてきた、一人の女子学生の言葉がありました。六六年、ある活動家に六〇年安保闘争などの話を聞いた後に発した言葉です。「とてもすばらしいです。

でも、私には何も無いの。それで闘って

はいけないのでしょうか？」

この空虚感から掘っていかば、現代までつながらる穴が掘れるのではないか、そう直感しました。

そして視点を変えて探しはじめたら、リストカットとか、不登校とか、すでに

六〇年代後半からはじまっていたのが分かったんです。

あの時代の叛乱は、本書をお読みいただければ分かりますが、高度成長で出現した大衆消費社会や高度資本主義社会への順応過程でもありました。元全共闘の人たちが八〇年代に各分野のスターになって活躍する。そのスタートでもあった。

ただ、あの時代に生まれた左派の言葉では、当時の「現代的不幸」も表現できなかったし、その結果として現代の空虚感もすくい取れなくなっている。その原因も、この時代を検証することで見えてきました。

もうひとつ、こういうこともあります。とくに連合赤軍事件によって、その後の社会運動はずごい縛りかけられてしまいました。本書では、そんな呪縛も清算できたのではないかと思いますよ。

その意味でも、若い人にこそ読んでほしいですね。

あの時の空虚感が現代へつながらる

一九七〇年前後の、全共闘運動のビラやパンフレットなどを読んでみると、一見、教条的な左翼用語、生硬な言葉遣いばかり並んでいるようにみえます。

ですから、一九九五年にNHKのドキュメンタリー取材班が、あの若者たちの叛乱を検証しようとして放棄してしまつたのも分からなくはないんです。

ただ、私も、以前『民主と(愛国)』を書いたとき、この時代の資料に目を通しました。で、そうした拙い文章の中に、彼らなりの不

幸が表現されているとも感じていたんです。戦争・貧困などの「近代的不幸」ではなく、アイデンティティの不安など「現代的不幸」ですね。

今まで、あの時代の叛乱を全体像として描き、社会科学のにとらえようとした例は存在しません。それなら、私が明らかにしてやろう、そう思ったんですね。昔の自分を英雄物語としてとっておきたいような当

小熊英二

1968



小熊英二

『1968 上・若者たちの叛乱とその背景、下・叛乱の終焉とその遺産』

(新曜社/税込各7,140円)